

目次

〔論 說〕

○鹽鱈の跳び蛆……………佐々木忠次郎…二四三頁

○海藻ウルシグサより滲出する酸に就て……………高橋 榮治…二四六

○サバ、サハラ、シビ、カツヲ類の釣漁具……………岸上 鎌吉…二五〇

○ヌマエビの變態に就て……………横屋 猷…二六四

〔抄 録〕

●シビ生態の一研究……………二八八

●鰻に就いて新らしき觀察……………二九〇

〔雜 報〕

●水産と冷蔵研究……………二九二

●磯魚の習性に就きての觀察……………二九六

●鮎卵の發生と鹹度との關係……………二九九

●牛堀より得しサケの幼魚……………三〇一

●湖底に於て酸素缺乏に依る魚の斃死……………三〇一

●鰻の速かなる成長度の實例……………三〇二

●駿河灣に産するエビの一種……………三〇二

●日本海方面にて新しく見たるエビ類……………三〇三

●アハビの幼貝……………三〇三

●シビ類の鰾……………三〇四

●ミヅガツヲ……………三〇四

●カツヲのアデ型模様……………三〇四

●ヤイト日本海にも産す……………三〇五

〔學會記事〕

○學會記事○新入學員○會員名簿……………三〇六

澤山の有機物が沈澱し居り夏の温度の上昇せる時などは湖底の水は大變腐臭を帯びて居る、大正七年七月下旬の調査に依ればかゝる底湖の水は酸素の含有量が一リートル水中二〇〇内外であつて甚だ少い、此量の酸素は魚を直ちに死に導く程度のものではないが長く留まらしむるには不足である。

魚類が筥中の餌物によりて誘はれ湖底に下りて筥中に入る時には再び湖の上部酸素含有量多き處に上ぼり來ることが出来ない、筥中に入らざる自由生活の魚は餌を時々湖底にて採ることあるも呼吸の困難に逢へば此部を遁れて上部に行き得るのであるから自由生活の魚には斃死するものなく獨り筥中に入りたる魚のみ斃死するのである、其れも長時間筥が湖底に沈め置かれたる場合にのみ起るのである。(兩宮)

鰻の速かなる生長度の實例

山梨縣下富士北麓山中湖には古來鰻を産するものと極く稀にて數年間に一匹、二匹と云ふ風に採れることがある位で鰻が居らなると云つても好いの

である、之れは山中湖から流出する桂川が數度の懸崖瀑布を過ぐる爲めに鰻は湖上出來ないのであると推せらる。

然るに大正九年十一月二夕乃至六夕の鰻苗を放流したるが其等の成長甚だ好く翌大正十一年の夏頃より漁獲せられ九月十月に至りては五十夕乃至九十夕位までのものが澤山に釣にかゝつたのである、滿一ヶ年にしてかく大きく成長したはいかに鰻の成長度の速かなるかを證するものにて蓋し又天然餌料の充分に存せしを證するものである。(兩宮)

●駿河灣に産するエビの一種 本種は伊東孝一氏が興津に於てサクラエビ (*Orchestoidea*) に

混するものを採集せられたもので屬名は *Oplophorus* に當るものである。此屬は最初 *Milne-Edwards*

ドワーツ氏によりニューギニア産のエビに與へられたものであるが、スペインス、ペルト氏はフィリッピン、ニューギニアより同種のもを又他の種類を一つはフィジー島より今一つはフィリッピン群島中のタブラス島沖より獲て之れを報告してゐる

るが何れも皆南洋産のもので本邦沿岸には之れに類するものを報告したのは見當らない。

今自分の見た標本は之等の種類に似たものであるけれども其記載は何れにも當らない様で恐らく新種とすべきものと思はれる。フィジー島より獲た *O. Longirostris* Bate に最もよく似て居るのであるが其異なる點を擧げて見ると軸狀突起が自分のものでは稍々短く胸甲の約一倍半で第二觸角の附屬肢より少しく長い。腹部第一關節の前下縁は比較的著しく凹狀をして下方に突出してゐる。

此屬のものは皆腹部の第三第四第五の關節が脊面に於て後方に長く延びて棘狀になつて居るが之が今迄の種類では上方に屈折して居るが、此種類では其様に曲つてゐない。此様な相異點があるので新種と認めて *Onphorus okinawensis* とし、和名は彼の地方でも特別に呼んで居ない様であるからトゲエビと呼びたいと思ふのである。之は第二觸角の附屬肢の外縁に棘が並んで軸狀突起も同様であり、胸甲にも腹部關節にも多くの棘があつて、サクラエビに混じたものを識らずして口に入れる

棘痛を感づるので此名を選んだのである。(横屋)

●日本海方面にて新しく見たるエビ類

大正十年十二月福井縣小濱へ行きたる際、魚市場にてフトミゾエビ (*Peneus latissulcatus*) を見又小濱水産學校の標本室にて同所附近にて得られたるデブエビ (新名) (*Nephrops thomsoni*) を見たり、前種の産額は僅少なるべし、然し後種は對馬海峡附近等にてトロールにて多數入る事あれば探檢すれば好漁場を發見する事もあるべし。(岸上)

●アハビの幼貝

大正十年七月十三日三崎油壺灣谷津博士別荘下より北に向ひたる沙底の處にて手繰網を曳きたるにホンタワラ、トサカノリ、ミリン等の海藻入來り、魚類は小さハタ、ゴンズイカワハギ、ハゼ各一二尾にて實につまらぬものなりしが、一尺餘のミリンの上に殻長十ミメのアハビの附着し居たるは珍らし、呼水孔の開きたるもの五つ、最新のものは未完のものなり、其閉ぢたるもの十二、最初の呼水孔のある處までの殻長一五ミメなり、最初三ミメ程の間、殻の外表面は淡赤色なり、其より以後は淡黄色、綠色、褐色等の色